



小論文

学 類	ページ	解答用 紙枚数	時 間
人 間 発 達 文 化 学 類	1～7	1枚	120分

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は7ページある。印刷不鮮明の箇所などがある場合には、監督者に申し出ること。
3. 解答は指定の解答用紙に横書きで記入すること。
4. 解答用紙の指定欄には必ず受験番号を記入すること。
5. 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
6. 解答用紙は持ち帰らないこと。

人間発達文化学類

- (注意)
- ・ 解答は指定された解答欄に横書きで記入し、字数は指定を超えないこと。
 - ・ 解答用紙は1行が20字、全部で1,200字となっている。
 - ・ 解答の際、句読点、引用符、カッコなどはいずれも1字に数える。ただし、行末の句読点などは字数に含まれないものとする。

次ページ以下の〈資料〉は、猪瀬浩平著『ボランティアってなんだっけ?』(岩波ブックレット、2020年)の一部である(ただし、出題にあたり原文の一部を省略している)。

この文章を読んで、問1と問2に答えなさい。

問1 資料の内容を400字以内で要約しなさい。

問2 資料の内容を踏まえて、ボランティアについてのあなたの考えを800字以内で述べなさい。

＜資料＞

自分のやっていることの「正しさ」を、疑わなくなってしまうのは危険だ。

一般にボランティアは「正しいこと」とされている。しかし、実際には、本当に「正しいこと」であるのかを思い悩んでしまうものであり、そしてそのことこそが重要なのではないかと前章で書いた。災害ボランティアだからといって、それが「正しい」とは限らない。どんな活動でもある面において「正しい」が、完璧な活動などなく、どこかに見落としている点や、見直さなければならない点があるはずだ。

(中略)

動員論——ボランティアはシステムによって動員されている

1995年に阪神淡路大震災があり、全国から多くのボランティアが駆け付けた。マス・メディアでも、ボランティアの活躍は様々に報じられ、この年を日本の「ボランティア元年」とする語りも生まれた。1998年には、「ボランティア活動をはじめとする市民が行う自由な社会貢献活動としての特定非営利活動の健全な発展を促進し、もって公益の増進に寄与すること」を目的に特定非営利活動促進法(NPO法)が議員立法で制定された。ここでいう公益とは、自分や家族など身近な人の利益ではなく、自分と直接かかわりのない人も含んだ社会の利益と考えればよいだろう。この法に基づき、特定非営利活動法人(NPO法人)の設立が相次いだ。

そんななかで、国や市場のシステムがボランティアやNPOを都合よく利用しているという批判も起こった。国家(国や地方自治体)は社会福祉などの予算をカットする一方で、経済的規制を緩和し民間企業の活動範囲を広げた。これまで国家が運営していた事業も、民営化されていった。民間企業による自由競争の領域が広がっていくこのような世界的潮流は、「ネオリベラリズム」とも呼ばれる。採算性が低い領域は民間の営利企業が参入しないため、ボランティアやNPOが補う。国はそれをただ見守るのではない。「公益の増進に寄与する」こと、「正しいこと」と奨励するとともに、それをおこなう人を高く評価する制度をつくり出した。阪神淡路大震災を受けて、文部省(現文部科学省)は1995年に各大学に対して、「被災地で活動しているボランティア学生の補講・追試・試験免除などの配慮を」と通達した。各大学でもボランティア講座の開講が続いた。やがて、文部省は中央教育審議会(中教審)などの場でボランティア

活動の推奨・支援や、ボランティア活動をしていることへの入試選抜での評価などを提言していった。

ネオリベリズムがすすむなかで生じた、国家や市場がカバーできない領域を、市民が自発的に補う。社会思想史を研究する中野敏男は、これを行政サービスをカットしようとする国家と、儲からない事業には手を出したがる営利企業が、それぞれに都合のよい形で、ボランティアに参加する市民を「動員」しているのだと批判している。それだけではない。ボランティアに社会を変える可能性があるのだと語る人びとも、結局は社会の多数派が考える「公益」の範囲でしかボランティアを考えていない。たとえば、原発反対運動やマイノリティの権利擁護運動など、今ある社会を根本的に問い直そうとする、政治的な側面を持つ運動への参加はボランティアとして考えられることが少ない。本業をおろそかにしてボランティアをすることも推奨されない。入試選抜でボランティア経験を評価することは、大学進学を選択せずにボランティアに打ち込む生徒のことは想定しないし、そもそも入試のあり方自体を問い直そうとする生徒の政治的な活動をボランティアと考えることもない。

何がボランティアで、何がボランティアではないのか？

ボランティアと国家や市場との関係を批判的に問いかける動員論は重要であるが、それが批判するように、ボランティアと政治を切り離さず、ボランティアと政治をつなげて考える議論は現実に存在してきた。たとえば、反アパルトヘイト運動に長年かかわってきた教育学者の楠原彰は、「ボランティア」が公害反対運動や住民運動、市民運動から引き離されると、「ボランティア活動」から批判的精神が抜き取られ、逆にまた、様々な反戦平和運動やフェミニズム運動、反原発運動などの市民運動から「ボランティア性」、つまり、素人性や自発性、多様な主体などが欠落しがちになる、と語る。さらに動員論が、ボランティアと政治を切り離す風潮を強め、ボランティア活動をする人が政治と向き合う意識を弱めてしまうとも言える。

実際、ボランティアと政治は簡単には切り離せない。

2004年に起こったイラク日本人質事件を思い起こそう。この時、イラクのファルージャで武装勢力に拘束された人びとは、現地の取材をしているジャーナリスト

だったり、ボランティアとして支援活動をおこなっている人だった。9日間の拘束ののち、解放された。解放前後から、政府関係者やマス・メディア、そして世間は彼女たちを、「日本政府の退避勧告を無視した無責任な行為をした」、「自己責任で行ったのに日本に迷惑をかけるな」と、強くバッシングした。

日本政府による退避勧告は、当時の小泉純一郎政権が、アメリカの始めたイラク戦争を支持するなかで出された。さらに、政府は自ら設定したイラク国内の「非戦闘地域」で国際貢献をおこなうため、自衛隊を派遣した(武装勢力は拘束した人びとを解放する条件として、自衛隊の撤退を求めている)。つまり、政府とそれを支持する人びとにとって、自衛隊がおこなう「国際貢献」は「正しい」ものであり、個人がおこなうボランティアは「悪い」ものとされた。同じ時期に中越地震が発生しており、解放された一人は、「日本が大変なときにイラクくんだりで何をやっているんだ」と言われたこともあったという。前章で僕が「災害ボランティアには公共性がある」とする本間らの語りを批判したのは、災害ボランティアが肯定される傍らで否定されるものの存在を思ったからでもある。

しかしイラク戦争の開戦理由については、当初から国際社会からも疑問の声が上がっていた。日本国内ではイラク戦争を支持しない人びとによって、反戦デモも起きていた。そんななかで、拘束された一人は戦争状態のなかで支援から取り残されたストリート・チルドレンの支援を続けていた。イラク戦争に反対する立場からは、自衛隊がおこなう国際貢献よりも、彼女の活動のほうが人道支援としてふさわしいとも考えられた。

ここで重要なのは、何が「公益」にかなった「正しい」ボランティアで、何がそうでないとみなされるのか、その基準は一つではないということだ。どの基準を採用するかをめぐる対立は、国家と個人の間にも、国家と国家の間にも、個人と個人の間にも生じる。

公共性とは、複数の「公益」がぶつかり合う領域や、様々な違いを持った、だから均質ではない人びとが交わるなかにある。政治学者の齋藤純一は、公共性と共同性の違いを次のように整理する。①共同体が閉じた領域をつくるのに対して、公共性は誰もがアクセスしうる空間である。②公共性は、共同体のように均質な価値に充たされた空間ではない。③共同体では、その成員が内面にいだく情念(愛国心・同胞心・愛社

精神等々)が統合のメディアになるとすれば、公共性においては、それは、人びとの間にある事柄、人びとの間に生起する出来事への関心(interest)——“interest”は“inter-esse(間に在る)”を語源とする——である。

障害のある人からの投げかけ

障害のある個人と、障害のない個人の間を考えてみよう。次の、重度の障害のある人から、ボランティアへ投げかけられた言葉を読んでほしい。

重度障害者は、世間一般の人が当然のこととして享受している教育、労働など全ての場からはじきだされています。つまり障害者は現代社会において、被差別的で被抑圧的なのです。今までのボランティア活動は、このような人達を「かわいそうな人達」あるいは「不幸な人達」と呼び「だから私達が何かやってあげるのだ」ということだったと思います。しかし、これは大変な心得違いです。

「かわいそうな人達に対して何かをやっている」という意識が、ボランティアをする人の上から目線であることに、多くの人は気づくだろう。ここでボランティアをする人は障害のない人であり、彼らの手助けを受けるのは重度の障害のある人だ。ボランティアをする人は、障害のある人が、障害のない人が学ぶ場や、働く場、さらにいえば暮らす場から排除されていることを意識していない。重度の障害のある人は、障害があるという理由で地元の学校ではなく、特別支援学校に入ることを求められる。この文章が書かれた当時はそれすらもできず、就学を免除される(学校へ行けない)こともあった。介助者を入れて地域で暮らすのも今よりは一般的ではなく、家族に世話をされて暮らしていたり、あるいは施設に入所したりがほとんどだった。文章は続く。

なぜなら我々を、不幸な、恵まれない、かわいそうな立場にしているのは権力であり、いまの社会でもあります。その社会を創っているのは他ならぬ「健全者」つまりあなた方一人一人なのです。あなた方は、我々をはじきだした学校で教育を受け、我々の姿をみられない職場で働き、我々の歩けない街を闊歩^{かつぽ}し、我々の利

用できない乗物、エスカレーターなど種々の器物を使いこなしているのです。このように考えれば、一人一人が、いや他の人はとにかくとしてあなた自身が差別者、抑圧者といえましょう。このような自己反省をした時に「では何をなすべきか」「何をなさねばならないのか」が問われ、その答は、「自ら行うもの=ボランティア」となるはずです。

この文章を書いたのは、青い芝の会のリーダーの一人である、横塚晃一だ。青い芝の会が闘っていたのは、障害のある人を、障害のない人よりも劣った存在と考える優生思想だった。彼らが最初に声を上げたのは、1970年の横浜市で母親が重度の障害のある子どもを絞め殺してしまった事件の裁判のときのことだ。世間は、「この子はなおらない。こんなすがたで生きているよりも死んだほうが幸せだ」と思ってわが子を殺してしまった母親に同情し、彼女の罪を軽くするための署名運動が起きた。これに対して青い芝の会は、もし障害のある子を殺して罪が軽くなるのだとしたら、障害のある子の命は障害のない子の命よりも軽くなってしまおうとして、厳正な裁判を求めた。彼らは世間の母親への同情が、障害のある人びとが生きる価値を無視したうえで存在していることを暴いた。やがて青い芝の会の運動は、障害を理由にした中絶に道を開く優生保護法への反対運動や、車椅子利用者の乗車を拒否するバス会社への抗議のため、自分たちを支援する人びとと共にバスを占拠する「川崎バス闘争」、障害のある子の普通学級就学を求める運動などを、障害のある人の生存と生活をめぐって様々な、時に世間との軋轢^{あつれき}を引き起こしながら展開していった。

だから、横塚の文章は障害のある人が障害のない人と違った暮らしを余儀なくされていることに何の疑問も持たずに、障害のある人に対してボランティアをした気になっている人びとを差別者や抑圧者と断じる。そのうえで、障害のある人に対する差別が世間に、そして自分自身の内側にあることをしっかりとみとめたうえで、障害のある人と共にその状況に対して何事かをなす人びとのことを、「ボランティア」と呼ぶべきだとする。

今、障害のある人が公共交通機関を使って街に出ていくことは多くの人が当たり前だと思っている。エレベーターやスロープも整備されて、かつてよりも出かけやすくなってもいる。しかし今でも、たとえば通勤ラッシュの時間に車椅子の人びととホー

ムを移動すると、たとえその人が仕事のために出勤するときだったとしても、鋭い視線でにらまれることがある。ここでは、スムーズな移動を妨げる障害のある人——少数者でもある——の利益よりも、スムーズに移動ができる障害のない人——多数者でもある——の利益が重視されている。横塚は、少数者が少数者だからといって無視されるべきではないと声を上げ、そして彼らと共に立ち上がる人びとをボランティアと呼んだ。

令和4年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 一般選抜 後期日程

人間発達文化学類の以下のアドミッション・ポリシーを踏まえつつ、資料を与え、1,200字程度で論述させることにより、受験者の読解力・理解力・思考力・表現力を総合的に判断する。

人間発達文化学類では、生涯にわたる発達への支援や、人間の発達を支える社会・文化への支援を通じて、学校はもちろんのこと、行政や企業、地域社会で活躍することを目指す意欲を持ち、卒業までに次の4つの力を身に付けたいと考える学生を受け入れます。

- ・人間の発達を支援する教育および文化についての専門知識や技術を習得し活用する力
- ・現代的課題や地域的課題への問題意識をもち、個々の事象を複数の観点から捉える力
- ・人や文化の多様性を理解し、共感的態度をもって価値観や考え方の違いを超えた関係を築く力
- ・学問固有の問いの立て方、ものの見方・考え方を身に付け、それらを活用しつつ社会の改善に向けて探究し表現する力

具体的には、猪瀬浩平著『ボランティアってなんだっけ?』(岩波ブックレット、2020年)による資料を与え、人間発達を支援する際に必要な資質や適格性を総合的にみる。

問1では、比較的長文の資料の要約を課すことにより、受験者の読解力・理解力をみる。

問2では、ボランティアに対する著者の多角的・多義的な評価を踏まえたうえで、ボランティアについての受験者自身の考えを論述させることにより、論理的な思考力と文章表現力を総合的にみる。